－所蔵作品紹介－

鹿目　尚志　KANOME Takashi

気が気でない気箱

きがきでないきばこ

作品データはこちら

一面に28個、四面で112個というぼう大な数の引き出しをそなえた箱。一見、どの引き出しも全く同じに見えるが、実際にあけることができる引き出しと、みせかけだけで全くあかないものが、ランダムに配置されており、この箱を使うためには、把手を次から次へとひっぱって悪戦苦闘しなければならない。作者の言葉を借りるならば「はりねずみのように全身の毛を逆立てて開けられることを拒否し続ける箱」なのである。

人間が毎日の生活で使う工芸品においては、「機能」は本来欠かすことのできない要素である。しかし現代工芸のおいては、工芸品を「使いやすさ」や「有用さ」という要請から開放しようとする試みがさかんにおこなわれ機能性をだいなしにしてしまうような表現が、時には皮肉たっぷりに、時にはユーモラスに展開される。同じ作者による「はこの奥はこの奥」という作品は、あけてもあけても扉ばかりで、なかなか中身にたどりつけないというもの。何か貴重なものが隠されているのではないかと期待して箱をあけようとする人間を、すました表情で一蹴（いっしゅう）するかのような作品である。

鹿目尚志（1927～）は旭川出身。東京美術学校油絵科を卒業、1966年にデザイン事務所を開設し、パッケージデザインの第一線で活躍を続けている。「気が気でない気箱」は、「はこで考える―あそびの木箱」展（北海道立近代美術館 1981）朝日新聞社賞受賞作品。木・ガラス・金属・布・陶など多彩な素材にアプローチしており、空間を意識した立体作品においても、意欲的な制作を展開している。

旭川美術館だより「氷華」No.21（1989.８発行）「収蔵作品から」より